

道元禪師の撰述類とその問題点

東 隆 眞

はじめに

まず、おことわりしておかねばならない。

ここに、道元禪師の撰述類というのは、主として、わが国の曹洞宗寺院や関係古文獻につたえられている、道元禪師の著述、筆蹟、その他をふくむのであって、いわゆる著作にかぎらない。

また、その問題点というのは、右の撰述類において、その真偽が今日なお取沙汰されている点、その書名ないし内容は明らかであるが、成立や伝承およびその存否に関しては、今後の検討にまづべき点のあるものを指すのである。

いま、このような限定のもとに、道元禪師の撰述類を紹介し、必要に応じて、それらの問題点などを解説するのである。したがって、本稿は、いわば、裏からながめた道元禪師の撰述類の目録にすぎない。その意味での、私の道元禪師基礎研究の一端である。

近來の道元禪師諸研究は、もはや、ここにかかげる目録の資料を、正面からとりあげることなしに、つたあるようにみえる。これらの資

料はやがて、散乱し消滅するにまかせられてゆくであろう。それは、これらの資料の利用価値がなくなったからであろうか。あるいはこのごろの研究傾向のすう勢にすぎないのであろうか。

いずれにせよ、これらの資料も、ひとたび観点を転じてみれば、あるべくしてあり、伝えられるべくして伝えられて、それ相応の存在意義をもっていることを銘記すべきであらう。一概に無視してしまうのは、正しいことではない。そこで、これらを取りあえず蒐集し、整理して、新しい参究、研究のひかりを今後にもとめたい。

ただ、この種の資料は、なおまだ諸方に埋もれているであらうし、管見のおよばざるところ、おもわぬ誤解や見落としもある。諸賢の御連絡と御教示を懇願してやまない。

正法眼蔵生死（秘本）

〔解説〕この「生死」の巻は、道元禪師が、「道心」の巻とともに、俗官に与えた法語であるとし（瞎道本光「正法眼蔵却退一字参」）、また

波多野義重の再度の懇請によって「全機」の巻の主旨を平易に示したものだから示衆年月がない（橋本恵光「道心巻提唱玄談」とし、また親鸞聖人が、浜子というところで、道元禪師に出会い、聞法して、弘子とともに贈られたとの言い伝え（西有穆山「正法眼蔵啓迪」）もある。また、近年、偽撰説（伊藤猷典「正法眼蔵生死卷高祖示衆の真偽につき宗学匠の教を乞ふ」愛知学院大学論叢第一巻他）、これに対する反論（河村孝道「正法眼蔵研究序説」駒沢大学仏教学部研究紀要第二十三号他）が唱えられるなど、その成立、伝承、真偽については、なお問題をふくんでいる。

正法眼蔵九十四陞座（晃全本）

〔解説〕この巻（陞座はシンソとよむ）は、永平寺第三十五世晃全が書写した九十六卷本正法眼蔵に収録されている。

その内容は、各祖師たちとの梅、伝法、伝衣、嗣書のこと、道元禪師入宋の状況、宗門の五位のこと、天童如浄会下における五十人の禅客たちの陞座の問答などが克明に記録されており、奥書の部分に、「為澆世児孫、在吉祥山永平寺道元撰之書之」「書于時建長三年辛亥結制良辰」とかいてある。晃全は、この写本、伝写過程について、次のようにしるしている。

此巻の写本は、太白峯記といへる書籍のおくかきに、遠州はまなの金剛寺直伝叟、四十五歳にして書とあり。かの本を再伝して、そのうちのにりてあるを、いまここにのするものならし。

此巻の正本は、太白峯記の十三紙より、このまきあり初に梅花嗣書とあり、まへの梅花のまき、嗣書のまきに、まきふるゆへに、五名のうち、陞座の名おもちふるものなり。

この晃全本系統の写本、たとえば千葉真如寺の寛巖が元禄六年（一六九三）に写した九十六卷本にも「陞座」の巻は収録されている（永久岳水「正法眼蔵物語」）。しかし、「陞座」の巻は、はやくも天桂伝尊（一六四八—一七三五）らによって、道元禪師の真撰とは認められない偽作であると断定されており（「正法眼蔵并註并調絃」）、こんにちも、この天桂説が支配的である。しかし、道元禪師伝、五位研究など、一個の宗典としては、きわめて興味ふかい資料ともみられる。

なお、この巻は、梅花、伝衣、嗣書、信書、嗣座などの異称があるといわれる。

正法眼蔵住山

〔解説〕この巻は、加賀大乘寺三州白竜（一六六五—一七六〇）の「宗統復古志下」（寛保元年）に出ている。次のとおりである。

又住山の巻に今マ大宋国住持と称する輩、間ま寺院に因て嗣を易ふるものあり、憐むへし仏祖の法正伝せざること、是れ畜生なり、一類の狗子なり、知識にあらず、豈に僧位にまじえんや。

また、これにさきだって、徳翁良高（一六四九—一七〇九）は、「小護法明鑑」（元禄十六年刊）をあらわし、刊山道白の文書を紹介して

いるが、そのなかに、

又住山卷、所謂今大宋国称住持輩、間住山而易法嗣承者可憐、仏祖之嗣法不正伝、是畜生、非知識、豈厠僧位哉。

とある。白竜は、良高の説をそのまま承けたものであることは、明らかである。

しかし、「住山」という題名の正法眼蔵については、いまのところ、これ以上のことは不明である。

入宋行路安泰祈願文（「金岡用兼禪師行狀記」、「永祖行狀建擧記訂補」）

〔解説〕これは、道元禪師が、貞応二年（一二二三）二十四歳の二月二十四日、入宋求法するにあたって、その行路が安泰であるように、加賀の白山権現に参籠したときの祈願文である。道元禪師の修行時代、とくに入宋前の作品として伝えられているのは、いまのところ、ただこの祈願文だけである。しかしこれは、大久保道舟の指摘（「道元禪師伝の研究」）を俟つまでもなく、真偽のほどは不明である。

新到戒法位次釐正上表文（元祖孤雲徹通三大尊行狀記」、「永平高祖行狀建擧記」、「碧山日録」）

〔解説〕「道元禪師が、二十四歳のとき、貞応二年（一二二三）七月頃？、天童山景德寺で修行を始めようとしたとき、明全とともに新戒の位におかれ、その末座に遇せられた。これを不本意とした禪師は、天

童山当局に抗議して是正を求めたが、なおときの寧宗皇帝に訴え出た。上表は、一回、二回、三回の三説がある。寧宗は、道元禪師の熱意に感じて、これを聞きとどけ、それから、外国の留学僧を、その戒次によって列座せしめるにいたったと伝えられる。ただ、今日の学界は、この史実について疑いをもっている（竹内道雄「道元」）。

宗門之全機三十四関（駒沢大学図書館蔵、東京都河村孝道氏蔵、東京都東隆真蔵）

〔解説〕この書は、その奥書によると、道元禪師が、天童如浄の室内で参学した問答商量を、みずから記録したもの。これを建長五年（一二五三）正月十五日、弟子の永平寺第二代懷弁に与えたことになっている。したがって、本書の内容、性格や伝承は、かの「宝慶記」と極似している。宗門の諸方で珍重されたものらしいが、とくに本文中、道元禪師の投機の偈が紹介されてあるなど、興味ふかい。

天正本「建擧記」に、道元禪師のことばとして、「予在宋之時天童示坐禪ノ法要三十余箇条、其一云莫見大海可觀青山溪水」とあるが、「坐禪ノ法要三十余箇条」とは、この「宗門之全機三十四関」のことを指すのだろうか。

「従天童南谷老師三十四関之名目」の別名もあるが、成立については、はっきりしたことがわかっていない。

仏果碧巖破関撃節

〔解説〕これは、世にいう「一夜碧巖」のことである。

道元禪師が、帰国する日の夕刻、圓悟克勤の「仏果碧巖集」の一本を入手し、これを書写しはじめたが、間に合わなかったところ、白衣の神人とも大権修理菩薩とも日本の白山権現ともいうが、忽然としてあらわれて書写を助筆し、無事に終了、将来することに成功したという。

本書は、もと福井県永平寺の秘書であつたが、のち石川県大乘寺の蔵するところとなり、とくにその法庫を「碧巖蔵」というのは、このことに由来するのである。大乘寺では、ふるくより、その第八十則までは禪師の書写、以降は白山権現の助筆であるとされている。いずれにせよ、道元禪師の著作ではない。

ところで、右のうち、白山権現等の助筆は、一片の伝説にすぎず、実は宋人の書記の援助とみるのが今日の常識であろうが、しかし、仏果克勤の嗣、瞎堂慧遠が、日本達磨宗第三代の懷鑑におくり、懷鑑は、もと達磨宗時代の弟子であつた大乘寺開山義价に与えた禅籍であるとの伝説もある（鏡島元隆先生「道元禪師の引用經典、語録の研究」）。

本書の道元禪師将来説については、宗門でも賛否両論がおこなわれているが、竹内道雄は、将来説を史実とみており（「永平道元と碧巖録」芸林四の五）、鏡島先生は、これに疑いをもっている。

また、いわゆる「碧巖集」の一夜本と流布本との関係について、鈴木大拙は、一夜本をもつとも古い原本とみるのに対し、伊藤猷典は、内容上もつとも整備された碧巖集とみる。これら二説と相違するの

は、鏡島先生である。先生は、たとえば、道元禪師が永平広録に引用した碧巖は、一夜本か流布本か、いずれとも決められないとする（鏡島先生著、前掲書）。

なお、大分県の泉福寺には、道元禪師が将来したという「宏智広録」「金剛經」が現存している。ついでにしるしておく。

五山十刹図 （石川県大乘寺蔵）

〔解説〕宋朝禅林の代表的立場にある五山十刹の伽藍とその構造、配置などを克明に記録したもの。これも、道元禪師の著作ではないが、道元禪師の将来説（無著道忠「伽藍図」）ないし伝持説（「大唐五山諸堂図」箱書、福井県常高寺旧蔵）が伝えられているので、念のために、かかげておくことにした。

宗門一般の伝承では、義价が、道元禪師の遺命を奉じて入宋、正元六年（一二五九）より弘長二年（一二六二）まで、諸山の伽藍を順観、その際に図写したもので、帰朝した義价は、この図をもとに永平寺の伽藍を一新したといわれている（元祖孤雲徹通三大尊行状記）。

このほか、聖一国師将来説（「東福寺史」）もある。もつとも、横山秀哉によれば、「五山十刹図」の道元禪師将来説ないし伝持説、義价図写説、聖一国師将来説いずれも、再吟味を要することである（横山秀哉著「禅の建築」）。

紀伊由良莊西方寺額（「法燈円明国師行実年譜」）

〔解説〕これは、右の年譜にしるしてある。それによれば、嘉禄三年

(一二二七) 十月十五日、道元禪師が、帰国して、京都建仁寺に仮寓時代のこころしい。

自賛(熊本県本妙寺蔵)

〔解説〕これは安貞元年(一二二七)に書いたという年号をもつ、道元禪師の肖像画の自賛である。原文は、「寒潭万丈浸天色、夜静錦麟徹底行、這畔那方和竿折、茫々水面月光照、嘉祿丁亥 建仁比丘道元赴請自賛。如來五十五世尊、非凡非聖空中花、莫管水裏天真月」とある。嘉祿丁亥は安貞元年にあたり、このころ、道元禪師は建仁寺に仮寓していたと言われているのであつて、住持職ではない。

ちなみに、永平寺には、道元禪師が、明全の画像に「平生行道徹通親、寂滅以來面目新、且道如何今日事、金剛焰後露真身、小師道元拜」と賛を付したものが伝わっていたという(天正本「建擗記」)。参考までにしるしておく。

越前妙覚寺鎮守勸請文(「永祖行狀建擗記訂補」。ただし天正本「建擗記」には見えず)

〔解説〕妙覚寺の鎮守に、熊野山、日照山、金峰山、賀茂、八幡、祇園、赤山、日吉、貴船、白山の十個所権現を勸請した一文である。これは、信者の要望に応えたものとされるが、史実かどうかはつきりしない。

正法眼蔵序(「拈評三百則不能語」)

〔解説〕道元禪師の撰述といわれる(神奈川県金沢文庫蔵。真字「正法眼蔵」いわゆる「正法眼蔵三百則」と呼ばれている)の序文である。後人の偽作であるとみられているが、はつきりしたことの決め手はない。

蘭溪道隆への返状

〔解説〕本状は、宋より来朝して、博多の円覚寺に寓していた蘭溪道隆(一二一三—一二七八)が、道元禪師に交遊を求める書簡をよせたのに対する返書である。末尾に、

宝治元年丁未孟冬比丘道元悚息咨目上覆円覚堂上和尚禪師 尊前とある。

「永平高祖行狀建擗記」に、道隆の書状と併載しており、面山瑞方をはじめとして、これらの往復書簡は史実であるとみる向きが多かつたが、近年、大久保道舟によつて、いずれも他人の捏造したものにすぎず、道元禪師と道隆とは、なんらの交渉もなく、また面識もなかつたと否定されている(「道元禪師伝の研究」)。

十六羅漢現瑞記

〔解説〕建長元年(一二四九)一月一日午の刻、道元禪師五十歳、永平寺方丈で、十六大阿羅漢を供養したとき、木像、絵像の各十六尊者が瑞花を現じたとかいてある。永平寺では、このような奇瑞が、これまで数回にわたつてあらわれたとしるしてある。原本は、茨城県金竜

寺にあり、おそらく懷井の代筆であろうといわれる。

観月画像自賛（福井県宝慶寺蔵）

〔解説〕一般に、「月見の画像」とよばれて、今日もつともひろく親しまれている画像に題された自賛である。

現在の筆蹟は、道元禪師の真筆とは、とうていおもわれない。とくに、識語のうち、「吉田祥山」とあるが、これは明らかに「吉祥山」のあやまりであろう。大久保道舟は、この画像は、宝慶寺第二世義雲の複製と推定している。

また、自賛は、七字、六字を一句として、合計六句から成り立っているが、その第二句、第三句は「永平広録」の流布本、輪王寺本に収録のものと対比して、字句にいちじるしい差異がみられる。

ちなみに、「永平広録」第十巻には、二十一首の自賛がおさめられていることをつけ加えておく。

紫衣辞退偈

〔解説〕後嵯峨上皇は、道元禪師の徳望をきいて、紫衣を賜わり、仏法禪師の勅号を下されることとなった。禪師は、再三にわたって固辞したが、ついに拝受して、その謝意を五言四句の詩によつてあらわした。しかし、生涯を通じて紫衣をもちいなかたという。

これは「永平開山道元和尚行録」、流布本「建誓記」にのせてあるところだが、宗門のそのほかの古記録にいつさい記載がないから、史実としてみることはできないというのが、学界の通説であるが、いか

にも道元禪師にふさわしい言い伝えではある。

永平道元和尚仮名法語（「曹洞宗全書」宗源下） 開山

〔解説〕これは、べつに「永平仮名見性抄」、「仮名見性抄」、「自見集」とよぶ。道元禪師が、永平寺で、山下の老夫婦にかき与えた十八条の法語である。

内容の項目は、向上之事、向下之事、理致之事、機関之事、大疑之事、大悟之事、大用之事、大微之事、本来面目之事、見性之事、得法之事、無相之事、無念之事、教内之事、教外之事、示出家之事、示僧俗因果、示一無位人事、となつている。

また、奥書には、

右之一一者仏心宗一大事因縁也、非印可之人者雖不能許、任所及筆舌而倭而伸仮名、以書之、仰願盲人端的有眼、明此一旨矣、建長二庚戌年八月十二日 山下老夫婦授与之畢。

とある。もつて、おおよその様子が察せられるであろう。

面山瑞方によれば、その第十六条（「示出家之人事」）以外は、道元禪師の真説ではないという。（「訂補建誓記下」）しかし、写本もいろいろ伝わっており、刊本は数回にわたつておこなわれている。

永平高祖十二時願文（明和五年、京都貝葉書院刊）

〔解説〕この願文の内容はいかなるものか、よくわからない。「新纂禅籍目録」（駒沢大学図書館編）に、この題名がかかげてあつたので、

それをそのまま、ここに転載しておく。

高祖十二時頌（天保十年、京都小川多左衛門刊）

〔解説〕これは、本秀幽蘭（

）の編集した「洞上正

宗訣」の附録に出ている。半夜子、雞鳴丑、平旦寅、日出卯、食時辰、禺中巳、日南午、日昃未、補時申、日入酉、黄昏戌、人定亥の十二時について、おのおの七言四句の頌をよんだもの。道元禪師の真作であるかどうかは、たしかめられていない。

伊呂波歌（「宗学研究」第十号）

〔解説〕伊呂波四十八字と、一二三四五六七八九十千万億の十四字とを、頭文字に配置し、三十一文字で、仏法の趣意を示した漢字のうた六十二首。偽作とみられている。

室内切紙総計四十三通（神奈川県大本山総持寺蔵）

〔解説〕これは、明治三十丁酉年三月十二日、定林寺第二十三世徳門が、古遊長老に与えた書で、このなかに道元禪師の名をもつのは、次のとおりである。

第三吉祥山永平開山道元大和尚卅字之切紙。

宋伝法永平道元大和尚元治二辛丑三月二十八日相承也

第二十七続松之初紙

大宋宝慶元年天童山景德禪寺如浄和尚授道元和尚了也

第三十二続松下炬之証文切紙

日本初祖永平開山從元和尚以来当門到吾迄伝附畢

この種の伝承は、はたして道元禪師にはじまるものかどうか、大いに疑わしいが、全国曹洞宗寺院を渉猟すれば、およそ千種類以上にものぼるであろうといわれている。

いま、題名の室内とは、仏法の真髓を伝え受ける場所、転じて師と弟子とが仏法を授受することの意味し、切紙とは、室内で授受すべきさまざまな問題を、順番を付してかきしるした、いわば、一般の在家教化に関する秘伝の虎之巻である。その意味での、宗侶のころろろえがしるしてある。

こころみに、「新纂禪籍目録」を一瞥すると、室内秘伝に関する数十種の書名が列挙されているが、なかに「道元禪師秘授法」（文政三年写本一冊、花園（ミノ南泉寺）蔵）などとみえる。しかし、室内切紙の研究は、近年とみに衰退した。

永平和尚業識図（「曹洞宗全書」宗源下）

〔解説〕この書の写本、刊本は、これまで、数回にわたっておこなわれているから、かなり広くもちいられたことがわかるが、偽書であるとするみかたが強い。単に「業識図」ともよぶ。

本文の内容は、その序によれば、百八ないし八万の煩惱は、一念にあつて、この一念のおこらないときは、常住の仏性たる本心であるから、成仏をこそさすひとは、心源の妄念をしらなければならぬという。無念は仏体であり、妄念は衆生の体である。いま、妄念の衆生の業識をあつめて一巻の画図とし、初心のひとに示すのである。

その項目は、依儒教行孝悌篇第一、依道教離情欲篇第二、依二乘離生死篇第三、依十地入仏教篇第四、依正覺出魔境篇第五、依成仏定法界篇第六、依遺教論仏乘篇第七、依般若頭仏性篇第八、依教内示禅法篇第九、依教外立宗門篇第十に及ぶ。各篇の終尾に、七言四句の頌をつけ、さし絵をそう入し、漢和混文体で、かなりの大部である。この項目によつてわかるとおり、宗門の教相判釈ともみることができ、かさねて付言しておくが、本書が道元禅師の偽撰であるとの説が広まつておるにもかかわらず、その後、再三にわたつて公けにされていることは、興味ふかいことである。

六祖壇經（石川県大乘寺蔵）

〔解説〕この写本の表題は、「永平高祖真筆六祖法宝壇經」とし、内題は「韶州曹溪山六祖師壇經」とある。この末尾に、「道元書」の三字がみえ、寺伝では、道元禅師の真蹟という。

しかし、大久保道舟は、実は、これは、達磨宗初祖大日房能忍の系統に伝わる禅籍で、第二代懷鑑から、永平寺第三世・大乘寺開山の義价へ、さらに総持寺開祖瑩山紹瑾へと伝来し、現存本は、義价の筆写

によるとする（「大乘寺本を中心とする六祖壇經の研究」）。

新出資料・道元禅師の真蹟と伝えられるもの三点

如来画像賛一紙（山口県祥雲寺蔵）

〔解説〕これは、昭和四十五年三月某日、山口県新南陽市福川・真福寺住職大野一良老師の紹介で、同市富田^{トシダ}の祥雲寺住職久楽宗哲師を訪ね、親しく拝見したものである。

原本は、香煙で真黒に変色しているのはつきりしないが、中央下部に、如来坐像が一体描かれてあり、上部に、賛らしき十数字がかすかにみとめられるけれども、とても判読できない。しかし、如来坐像の左傍には、「沙門道元書」の五字が、はつきりとみとめられる。

この原本の裏には、次のようなことが記録されてある。そのまま再録しておく。

如来裏書之写如此

此如来御本尊者薩州之本寺ヨリ出

道元和尚御筆也

応永十四年鹿王山給宝入

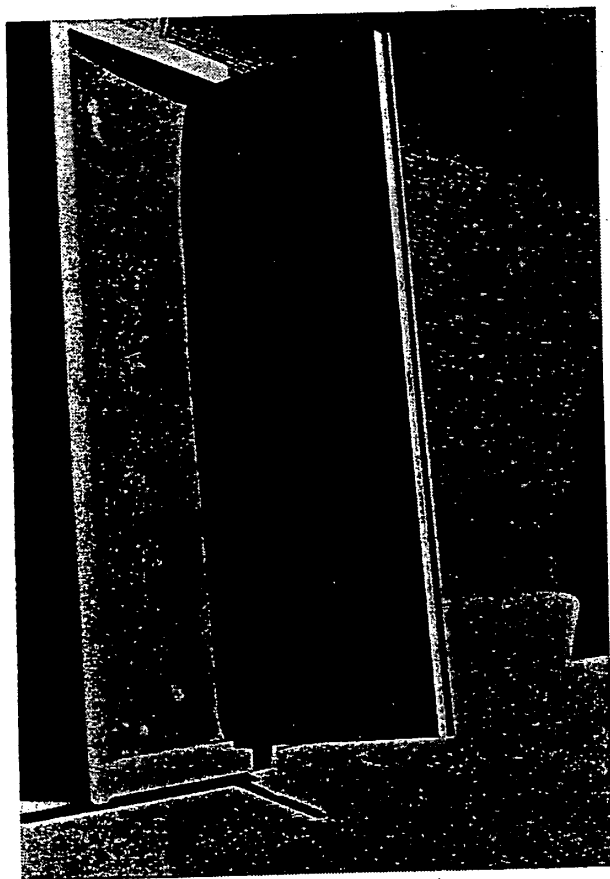
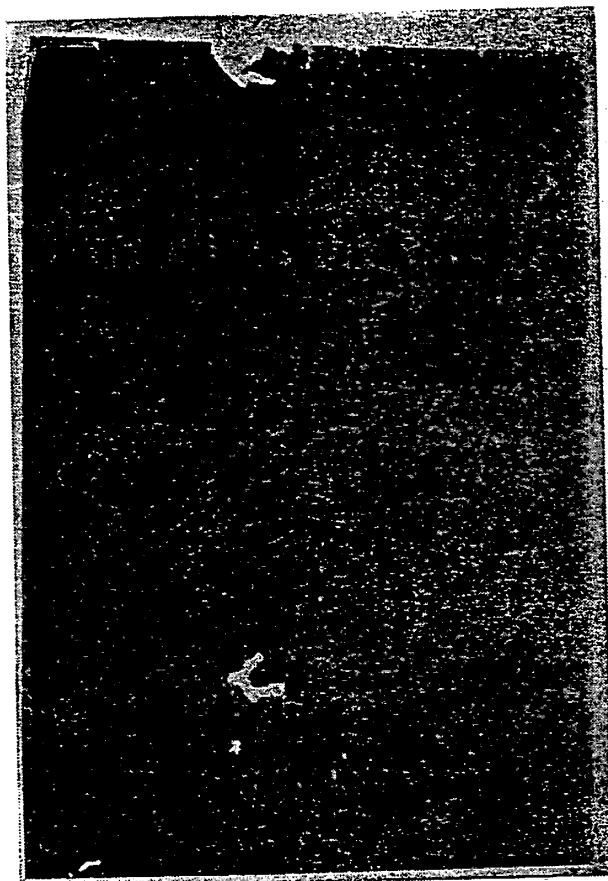
天下一幅之禅物也備中国

古土上総介

元康 花坪

宇多天皇孫子木原源浄入道持之

(写真は山口県祥雲寺久楽宗哲師提供)



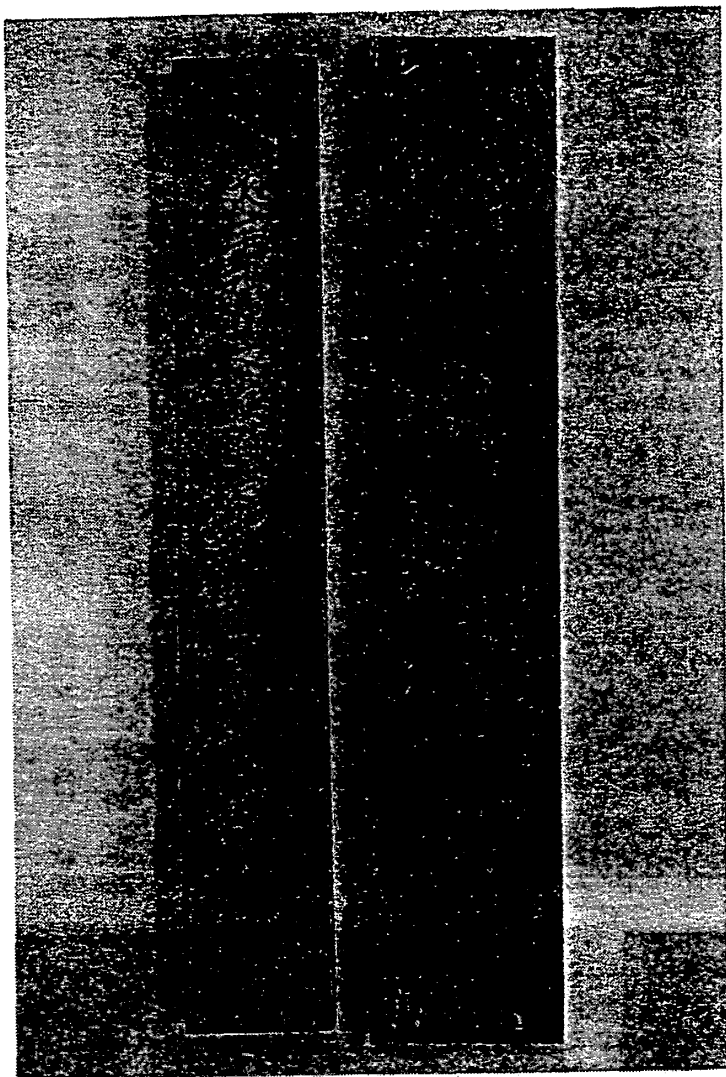
從主君拝領也

なお、これは、かつて山口県きつての素封家で、大本山永平寺の篤信者でもあつた祥雲寺の檀家総代、道源家^{ドウゲン}の位牌安置処に、久しく秘蔵されていたもので、木箱の観音開きの扉には、

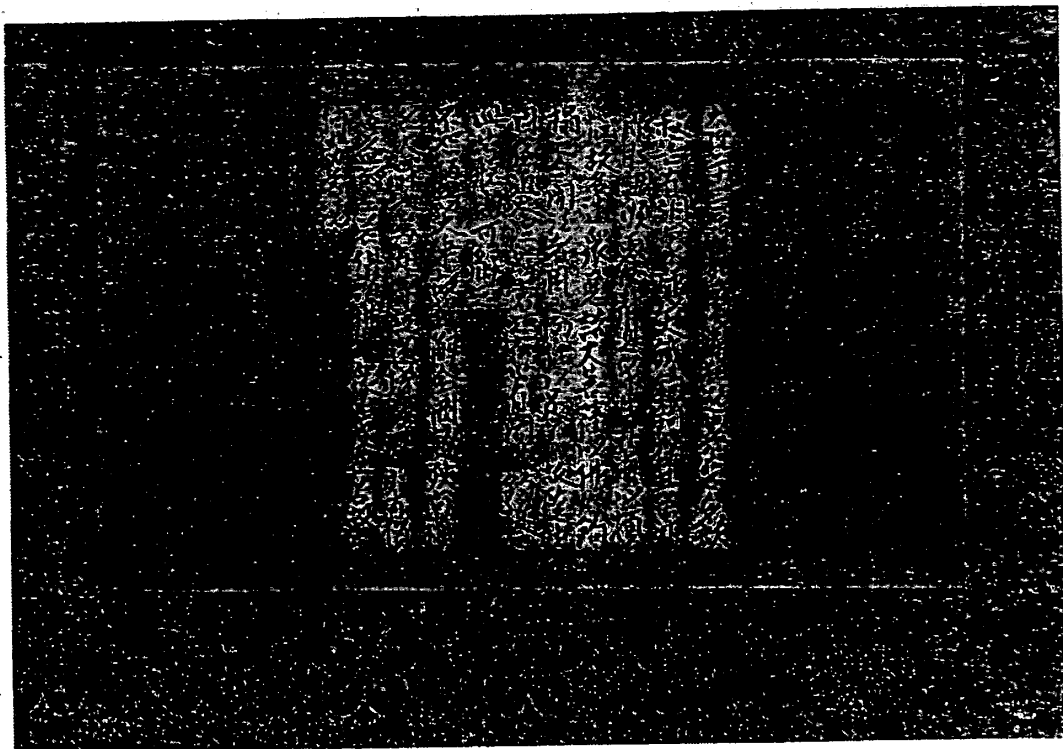
此古幀最有来由不涉二念直心可以信奉者歟

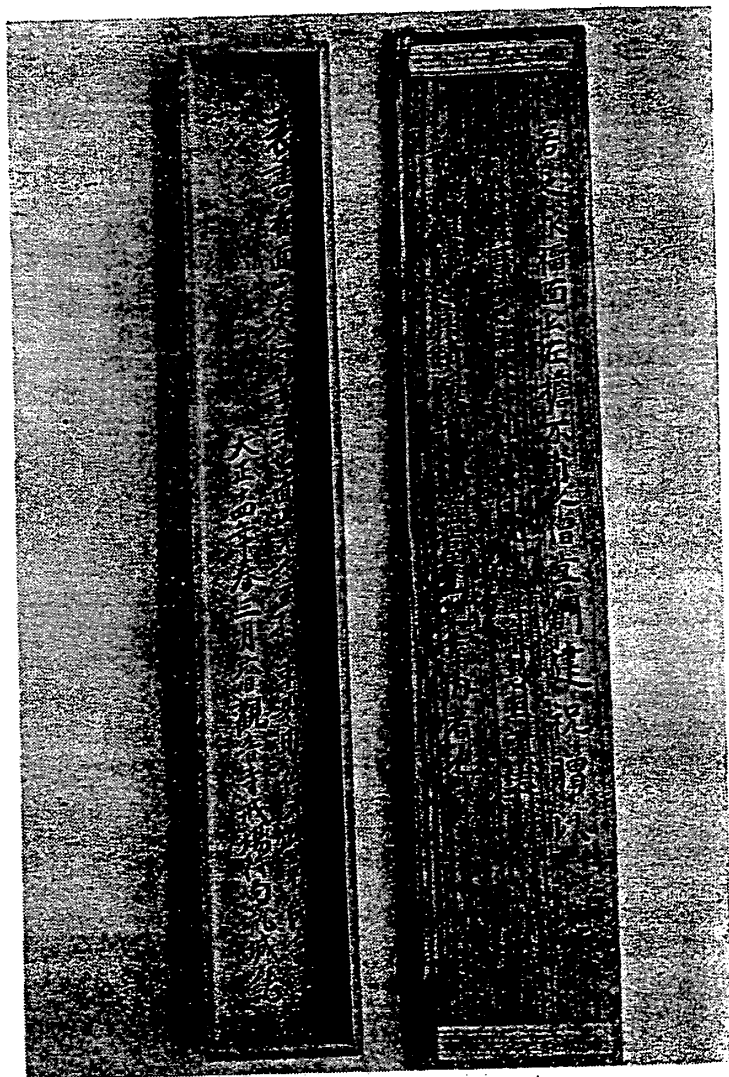
皆昭和十四己卯春彼岸第五日於道源氏邸而拝観之

(熊本県東向寺蔵・東京都伊藤文雄氏撮影)



(熊本県東向寺蔵・東京都伊藤文雄氏撮影)





(熊本県東向寺蔵・東京都伊藤文雄氏撮影)

とおり、十一行、百四十七字である。

大経二十三云譬如醉象狂逸暴惡多欲

殺害有調象師以大鉄鉄鉤搦其辺鼻

即時調順惡心都息衆生亦爾以煩

惱故多造衆惡諸大菩薩以仏法鉤

搦之念聞法者因之而住以足義故聽法

因縁近大涅槃當知宿世有聞法鉤故念

此生聽則可解之

不知宿謗大乘故行解全闕余殃尚積

名大罪人為是等説還増謗罪則有損

無益経云若但讃仏乘衆生没在苦云

何勞為説

しかし、この本文の筆蹟は、卒直に評して、道元禪師の真蹟とはみなしがたい。おそらく真蹟の模写であらう。

永平六十八世慧昭七十八題敬識 印
と三行に記入してあるのが目につく。

永平祖師之真蹟一幅(熊本県東向寺蔵)

〔解説〕これは、昭和四十六年三月二十二日、駒沢学園女子高等学校伊藤文雄教諭とともに、熊本県本渡市本町、東向寺に住職岡部禪竜老師を訪ね、老師の案内で、あまたの寺宝を拝観したとき発見した一軸である。現存の原寸は、たて二十一・四厘、よこ三十六厘、本文は次の

宝之部として、

一、永平祖師御真筆 伝承 一

二、同 一

とある。これによれば、昭和十一年代、東向寺には、道元禪師の真蹟が、二軸あつたと読める。

ひるがえつて、いま、右の真蹟は、二重の軸箱に丁重におさめてある。外側の箱には、「永平開山真蹟一幅」とおもて書きがしてあり、内側の箱のおもて書きは、「永平祖師之真蹟一幅」とある。もとは、外箱と内箱は別個の存在で、それぞれ一軸づついれてあつたものか、それとも、外箱は一軸だけ入れた内箱を嚴重にまもるためのものにすぎなかつたのかは、はつきりしない。内箱のふたの裏には、

若之永福面公左担不肖之僧堂創建祝贈以

宝曆辛巳結夏制日東向現住靈泉惠照謹誌

永平祖師之真蹟鎮護永置当山之室内者也
と三行にしたためてある。

内箱の底には、

表書者面山老人之筆蹟也面山老人玄孫

勅賜明修元峰禪師証焉

大正十四年春三月六日観音寺戒場侍者瓶城誌

と二行にしたためてある。たしかに、内箱のふたの表書きは、面山瑞方の筆蹟である。これは疑う余地がない。したがつて、宝曆十一年（一七六一）、面山が靈泉惠照に贈つたときのものは、道元禪師の真蹟であつたと考えられるが、現存のこの一軸は、のちに、だれかが模写したものと想像される。

永平祖師真蹟短冊（大分県英雄寺蔵）

〔解説〕 この短冊は、昭和四十六年十一月四日、大分県竹田市の英雄寺住職佐久間太山老師の御道愛による、くわしい御教示を仰いだ。よつて、太山老師の御説明と御写真とを、そのまま転載させていただき、解説に代える。

英雄寺
所蔵 永平祖師真蹟短冊について

当寺に古くから伝はる道元禪師真蹟の短冊について述べる前に、その依つて来る由縁を、探ぐることにより、尚、詳しく知る事が、出来ると思ふ。

豊後国竹田、岡城下英雄寺六世梅聞祖芳の徒、漢月禪胡和尚は、享保の頃（一七二五）越前空印寺に住している、曹洞高祖道鏡仰、実践躬行の第一人者である面山瑞方禪師を、欽仰して、元文、寛保の頃より宝暦五年に至る間、永らくその巾瓶に随侍していた。

その間、京都の永興庵の建立や建康普説、正法眼蔵隨聞解等の編纂に助縁し、非常に、因縁浅からぬものがあつた様である。

漢月禪胡和尚は、宝暦の頃面山老師法系の建立になる豊後庄内、永慶寺二十四世として選ばれ首先住職し、同年、先師英雄六世梅聞、豊後国東の名古刹、泉福寺に輪住するに依り永慶寺より先師の許に皈依り英雄寺の七世として移った。

神野真一師著「面山和尚法孫譜」に依れば面山和尚語録の中に禪胡に題する偈が、十数首掲げられている。之を拝するに、面山、禪胡の暖皮肉の程が殊の外窺える訳である。

当寺に保存されている面山老師の偈に、
付豊後漢月禪胡侍者

胡来胡現漢来漢 宝鏡光明三昧新
此是永平真面授 百千万劫属当人

永福寺面山手艸□□

と共に、永平道元禪師短冊に添えた面山老師の愛弟子衡田盥漱和尚の添手紙に曰く

嘗先師面山老人在京之日、新古今和歌集 古冊一套有惠之者、師熟視之則永平祖師 少壮時所筆真蹟也、師雖有難希有乎、其因縁之所感而珍藏既久矣、今也滅後援其中歌一首寄遺于豊後州竹田城下英雄古刹以為寺鎮法宝因述其来由代印紀介

于時 明和九年壬辰仲夏日

嗣法小師 衡田盥漱 謹識

とあり、

当寺過去帳を見る時、当山七世漢月禪胡大和尚 明和六己丑天九月十六日遷化当山六世の法孫、当州岡城下渡瀬の産と記され、禪胡和尚示寂後三年を終て遺贈された事になる。面山老師遷化と一日違いで示寂されていることも何か奇しき因縁であらう。

道元禪師の短冊は横四糎三糎縦二十二糎三糎の鳥の子紙に水茎の跡も鮮やかに、

家蓮法師

達ちいて、津ま起於里こし片をか野

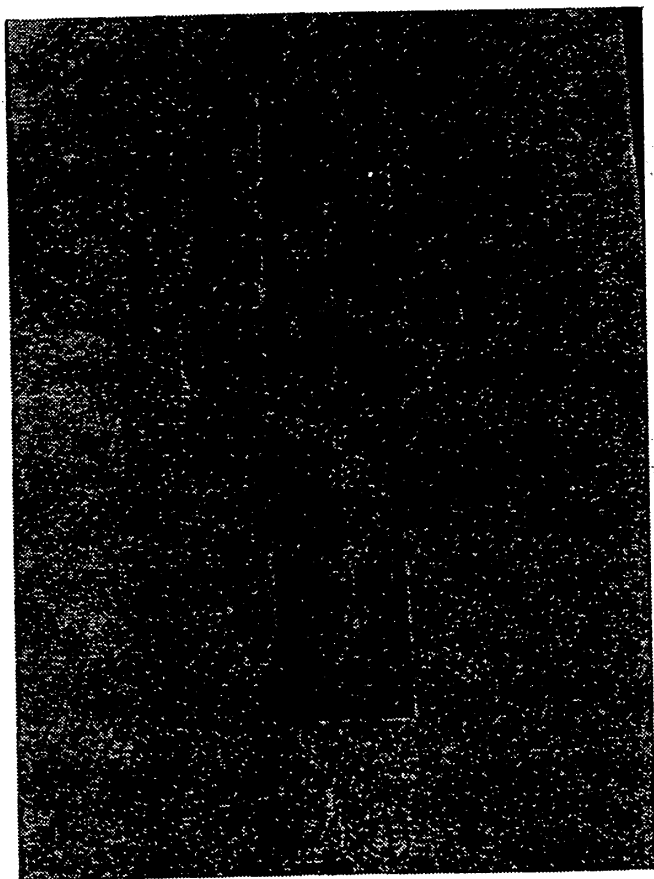
布かき やまじと な里に今るか奈

とある。右の歌は「山家送年に待べりける」と題して寂蓮法師の歌である。

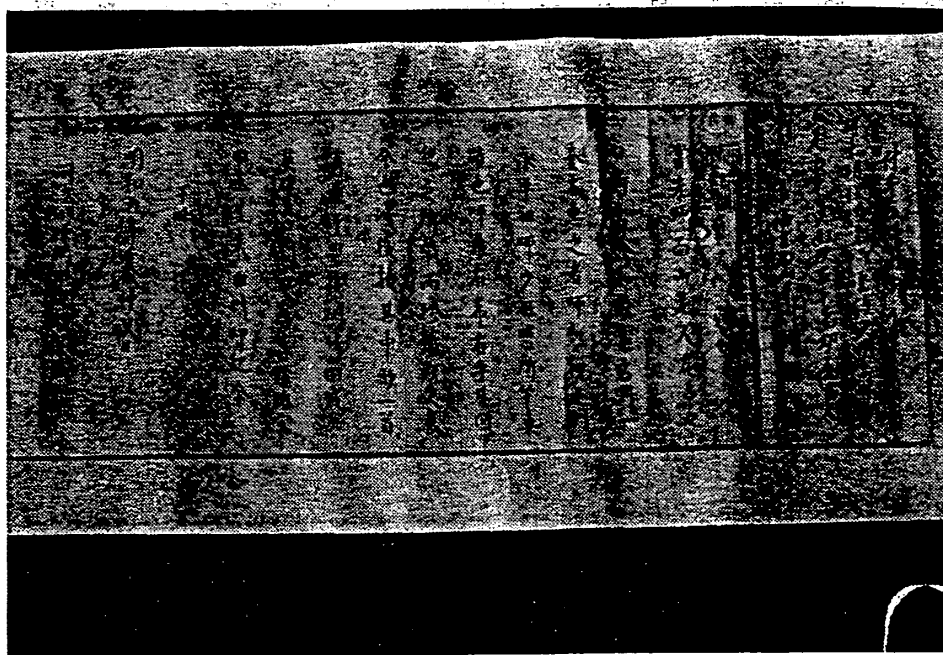
又極彩色の面山老師の肖像一幅も保存されおそらく禪胡和尚朝夕焼香札拝していたものであらう。往昔の祖師方師資の關係の温さが一入に感ぜられ、今の世に何か淋しさが思はれる次第である。

英雄二十世法流太山誌

以上のとおりである。太山老師の格別の御好意に、深甚の謝意を表するものである。



附 録



(1) 以上のほか、一般に、ひろく伝わっている道元禅師の撰述類は、次に掲げるとおりである。大久保道舟編「道元禅師全集」(春秋社刊、筑

摩書房刊)によつて、その詳細をみられたい。

- 宝慶記 一巻
- 永平広録 十巻
- 正法眼蔵 九十五巻
- 普勧坐禅儀 一巻
- 普勧坐禅儀撰述由来 一紙
- 学道用心集 一巻
- 正法眼蔵三百則 三巻
- 正法眼蔵随聞記(懷井編) 六巻
- 三国正伝菩薩戒血脉 一通
- 典座教訓 一巻
- 出家略作法 一巻
- 弁道法 一巻
- 赴粥飯法 一巻
- 衆寮箴規 一巻
- 知事清規 一巻
- 永平寺仏前斎粥供養侍僧事 一紙
- 対大己法五夏闇梨法 一巻
- 永平寺今告知事 一紙
- 教授戒文 一巻
- 教授文 一巻
- 仏祖正伝菩薩戒作法 一巻
- 授理観戒脈 一巻

○授覚心戒脈	一卷
○嗣書図	一枚
○舍利相伝記	一枚
○了然道者に示した法語	断簡
○宇治観音導利院僧堂勸進疏	一篇
○開山御詞	一卷
○如浄禅師統語録	一篇
○今松道詠集	一卷
○和歌 新後拾遺和歌集	雑春歌 一詠
藤葉和歌集	第五恋歌上 一詠
菟玖波集	第十四雑連歌一詠
○一葉如意輪観音贊	一枚
○近衛兼経との問答法語	一篇
○仏殿釈迦仏自造発願の書状	一通
○波多野義重宛書状	一通
○附波多野広長偈	一通
○如浄禅師諱辰法語	一篇
○立春大吉文	一紙
○冬至大吉文	一紙
○鎌倉郡名超白衣舎示衆	一篇
○吉祥山命名語	一篇
○永平寺庫院制規	一紙
○尽未来際不離当山法語	一篇

○明全和尚戒牒奥書	一紙
○永平寺住侶制規	一篇
○羅漢供養式文章稿	二篇
○伝真筆 仏垂般涅槃略説教誡經	一卷
○永平寺三箇靈瑞記	一紙
○上洛療養偈	一首
○遺偈	

(標題は、從來の通称にしたがつておく)

(2) 右のほか、諸方に散見する道元禅師の撰述類をかがてみると、次のとおりである。これらは、ほとんどひとびとの目に触れることもなく、これまで研究の対象にもならなかったらしい。以下、手あたり次第に列举してみる。

○正法眼蔵拾遺第四 一本には正法眼蔵第六十四一枚法語とあり(『宗学研究第十号』収載)

○法語和論語卷八(大久保道舟編「道元禅師全集」収載) 一篇

○碓米事(詮慧・経豪「正法眼蔵聴書抄」附)

○教授坐禅(大久保道舟編「道元禅師全集」収載)

・「永福面山和尚広録」卷第十九第二十に掲げてある真蹟類 十種

(「曹洞宗全書」語録三)

○伝真筆・仮名坐禅箴(熊本県広福寺蔵)

○伝真蹟・階書坐禅箴(熊本県大慈寺蔵)

○伝真蹟・行持卷(熊本県大慈寺蔵)

○二十五条衣(熊本県大慈寺蔵) 道元禅師の手縫という

・伝承陽大師真蹟（熊本県大慈寺蔵）

○木魚（福岡県明光寺蔵）道元作と伝える。

○木板（天正本「建擲記」）道元の二字がはりつけてあるという。

○自作の木像（京都府誕生寺）

・伝真筆和歌二首（岸沢惟安遺稿刊行会「図睡快菴隨筆」所載）

・聞鷲子声御法語（明治三十一年五月十五日発兌「宗報」第三十四号）

・天童如浄語録（右同） 写本か

・法印仮名本（日遠）「法華訳和尋跡抄」

・法華玄義 平野康太郎氏所蔵の文書によれば、面山瑞方は、道元禪師叡山在学中の写本（瑠璃光寺蔵）という。

・護国正法義（道光「溪嵐拾葉集」卷第二）

○正宗禅鑑（駒沢大学図書館蔵）

（以上、○印は現存、・印は存否不明）

・このほか「道元禪師研究の手引」（永久岳水著）をみると道元禪師の真偽不明の書として、

○梅花嗣書卷

○法華経仮字鈔

○五位鈔

○天童参問代語

○天童参問代語綱要

○縁思宗

○天童参問三十四話

○願文

○室内断紙

などが挙げられている。

このうち、「梅花嗣書卷」は、「陞座」巻の類書であろうか。「法華経仮字鈔」は、日遠が「法華経和尋跡抄」で、わが国最古の法華経和訳という、道元禪師の「法印仮名本」というものにかかわりがあるのだろうか。「縁思宗」とは、なにを指すのか、見当もつかなかったが、最近におよんで、表題を「大陽明安大師十八般」（内題は、「郢州大陽開山大師一十八般妙語勝句秘訣図」とする写本を手にした。このなかに、本書を、「菓芝草」「悟上書」とも名づくとのである。また、「宗門一大事之因縁」とするといふ。よって、おおよその内容の傾向が察知できよう。末尾の部分に、「如浄—道元—懷井—義介—紹瑾—紹碩—寂靈—恵明—恵徹—正文—（中略）—正桃」という伝承の系統と「前竜泰六世正孫王竜門正桃伝附既畢、嘗元龜参年壬申林鐘初六日」という伝写の年記がみえる。「天童参問三十四話」は、「宗門之全機三十四関」を指すのであろうか。「願文」は、「永平高祖十二時願文」の略称であろうか。「室内断紙」は、「室内切紙総計四十三通」のことであろうか。

(3)また、佐賀県の某寺には、加賀大乘寺第二十六世月舟宗胡（一一六一—一六九六）の添書をもつ道元禪師の真筆断簡が現存しているという。また、東京都の吉祥寺にも道元禪師の真筆が秘蔵されている

という。また、島根県永明寺にも、天台関係の真蹟が伝わっているという。道元禅師の随徒、永平寺第三世、加賀大乘寺開山、徹通義价の編録とされる「永平開山御遺言記録」および義价の資、加賀大乘寺第二代、総持寺開山、瑩山紹瑾の「洞谷記」「洞谷開山瑩山和尚之法語」「伝光録」「報恩録」(瑩山の偽撰といわれる)あるいは京洛永興寺開山詮慧、その資経家との共著「正法眼蔵聴書抄」には、道元禅師の和歌、偈頌、垂示の類いが、随処に散見される。

(昭和四十六・十二・三十一・於鬼鬼窟改稿)

この小論を、

敬慕する、

和裁の第一人者であった、

文徳院殿玉節慈照大姉、勲四等

岩松マス先生の霊前に、

つつしみてささげたてまつる。